2009年度 修了

生きがいの人間学

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
高田　国夫

D'où venons-nous ? Que sommes-nous ? Où allons-nous ?

≪我々はどこから来たのか　我々は何者か　我々はどこへ行くのか≫このゴーギャンの最高傑作は、縦 139.1 ㎝横 374 ㎝の巨大なキャンパスの中に、人間の誕生から老いて死んでいくその物語を描いている。自分はなぜ生まれてきたのか。どんなふうに生きて死んで行くのか。子どもの頃によく考えたことがある。しかし、いつも答えが見つけられずに途中で考えることを諦めていた。その後も人生の転機が訪れる度にこの問いが頭のなかを擡げ、さらに、何のために生きるのかという問いも加わり、ますます混乱の度合いを深めていくことになった。特に「何のために生まれてきたのか」という自己存在への問い、この自分自身のあり方や、死が不可避的事象であるという人間の有限性について、その限られた時制に対する不安とそれに伴う虚無感の表出など、抗い苦しみながら、実存とは何かという究極的な問いに突き当たる。この先どのように生きそして死んでいくのか、自ら主体的に選び取っていかなければならない自己の人生に対し、生きがいというものが果たす役割とは何なのか、この日本語の持つある種漠然とした言葉の概念を解き明かしながら、その本質を捉え、超高齢化社会に生きる高齢者に焦点を定めながら、その意味するものを「生と死」の視点から整理したいと考える。

第一章では、「生きる」ことについて、先の二つの大戦を生きたほぼ同時期の二人、神谷美恵子（1914.1.12-1979.10.22）と V・E・フランクル(1905.3.26-1997.9.2)を取り上げ、それぞれ『生きがいについて』と『〈生きる意味〉を求めて』を軸に、神谷の問う「生きるかいあるように感じさせているものはなにか、ひとたび生きがいをうしなったら、どんなふうにして新しい生きがいを見いだすのか」、またフランクルの「人間存在のこの自己超越性を人が生きぬくその限りにおいて、人は本当の意味で人間になり、本当の自分になる」、「人間は人生から問いかけられている」とはどういうことかについて考察する。つづいて第二章では、同じく同時期に生きたジャンケレヴィッチ(1903.8.31-1985.4.10)が死というものを「死のこちら側の死」、「死の瞬間の死」、「死の向こう側の死」の三つの問題領域にわけて考察している、その『死』を読み解きながら、老い・信仰・安楽死・暴力……、そして何よりも〈死を背負った存在〉という永遠のテーマから生の意味を考察する。最後に第三章では、第一章と第二章の「生と死の考察」から、特に高齢者に焦点を当て、生きる意味と生きがいの問題を再検証する。